

2017年9月2日

1985年までのシチリア島のローマ時代別荘遺跡の調査に続けて、青柳正規さんはイタリア半島本土のタルキニアという街の近郊にあるローマ時代別荘遺跡の発掘調査を手がけることになって、少し事情があって実際には調査は1992年から始められた。

タルキニアの位置

タルキニアはローマの北西、約90kmのところにある中世以来の町並みの残る街。

私の役割

現場監督並びに生活全般をみることで、3年間は面倒を見る、の約束
1992年から1994年まで、夏の3ヶ月間がタルキニアでの生活
95年からは現場の指揮を大阪文化財センターから来てくれていた松山聡さんに委ね、バックアップに回った。

調査は2004年まで続き、その間は毎年、期間の長短はあったが、出かけていた。しまいには夏に帰省するような感覚にもなった。

生活風景

毎年夏を過ごしていた街の郊外にある **Colle Marina Residence** で、この2階のフロアの3部屋を借りていた。

部屋の中は暑いのでたいていベランダにテーブルを出して食事をとっていた。恐れ多くも青柳さんに肩をもんでもらっている私。

遺跡の環境 Villa Romana a Cazzanello→VRC と略称

Google マップでみられる私たちの発掘した遺跡の現況。真ん中に小屋があるが、ここは元々ルネサンスの頃から続いているというサッケッティ家の私有地で、畑として使われていた。この小屋は夏の避暑用の別荘。畑には年ごとにトマト、小麦、ある年にはひまわり畑になっていた。右の方の四角い区画のところも遺跡で、1986年の地形測量に伴って行われて試掘で、墓地遺跡だということがわかっている。残念ながらここはずっと手つかずのまま終わった。

1986年の行われた地形測量で作成された地図に、発掘のための区画、グリッドの設定をしたもの。このラインを引くにあたって、よくやるのは東西南北に沿ってラインを設定するのだが、このときは、86年の試掘で得られたここにあるだろう建物の基礎と思われる壁体の方向と、もう一つここに建っている別荘の建物の方向を参考にした。東西南北とずれてグリッドを設定したのだが、おおむねこの図の横方向を南北と捉えている。

サッケッティ家別荘の壁

別荘の壁にはこのようにローマ時代の建物に使われていたであろう建築部材が組み込まれている。こういうことからこの別荘の建物は地下にあるであろうローマ時代の建物の基礎を使っているのではないかと想像した。

発掘調査本部の松林

松林の中に小屋を建て、食事用の机もつくった。松林の中にテーブルをつくって昼食や休憩。下の2枚は調査が終わったあとのフェスタでの一コマ。

発掘が始められて、作業員のおじさんたちの最初の仕事はこのテーブルとイスをつくることだった。作業用の器材などを入れておくプレハブの小屋よりもまず食べるための場をつくる。さすがイタリア、アモーレ、カンターレ、マンジャーレの国と感心。

92年の vano1

vano は空間とかスペースの意味で、壁に仕切られた空間は必ずしも部屋とは限らないところからこう呼ぶこととした。表土を剥ぐと建物の壁体が出てくる。少し深くなっているところは 86 年に行われた試掘のトレンチ。実は、1986 年に行われた青柳さんに許可された調査はあくまでも遺跡の測量調査だけだったそうで、測量調査は福岡県教育委員会からお二人を派遣してもらって行われた。ところがこの時に測量だけでなくトレンチを開けて小発掘をしてしまったものだから、許可された以外のことをしたというので、青柳さん曰く、「ブラックリストに載ってしまった」よう。それでここを発掘することは決まっていたもののなかなか実際の許可が下りず、1992 年になってようやく実現した。

はしごを建てて写真撮影。こんなクレーン車を調達してきて、この上のゴンドラに乗って全体の写真を撮った。海岸なので午前中と午後では風向きが逆になり、午後になると海風が強くなる。ゴンドラも相当揺れます。昼頃にはナギの状態になって写真撮影にはちょうどよかったのだが。

3つのアプシスを持つ三葉形の部屋

東アプシスには、この建物が破棄されたあとにつくられた大きな窯がある。内側は熱をうけて真っ赤に焼けている。パン焼き窯か、ピッツアの窯もこんな構造だろうか。

クローバーの根っこのところには平たく四角い大きな石が対置されている。表面はきれいに調整されているとは言えず、この上に何かを載せるにしてもざらざらだった。

泥棒にやられた 野尻さんの慰問

この年調査の終了近くになって、現場においてある機材を入れた倉庫が荒らされ、また遺跡で出土したモザイクのテッセラが盗まれた。

タルクィニアにたくさんあるエトルリア時代のお墓は副葬品が豊富なので、やってはいけないことだがうまく一つ盗掘できれば一生食うに困らないくらいの財産ができるそうだ。このタルクィニアというところは、昔から盗掘が盛んなところで、発掘調査をしていると必ずといっていいほど泥棒にやられるという土地柄なのだそうである。

そして我々も狙われた。何年かたってからわかったことであるが、実はアパートの隣人にその手の仕事をしている人がいて、我々の作業状況などはしっかりと把握されていたようだった。

朝、現場に到着したところ倉庫の鍵は壊され中を開けると異物を入れて保管していた箱がひっくり返され散乱していた。そして vano 1 にいくとあるべきはずのモザイク片がいくつかなくなっていた。

こんなモノとってもしょうがないのに、と情けない思いと泥棒にやられた悔しきでいささか呆然としていたところに、ローマからチェントロ裏千家の野尻命子さんが車でやってきた。そしてお茶を点でて慰めてくれた。そのときのこと、気持ちを思い出すと今でも涙ぐみそうになる。お茶のたしなみなどないが、野点のお茶のおいしかったこと、そして普通なら和菓子がでるところだろうが野尻さんはチョコレートを出してくれて、お茶ってこんなに身近なモノなんだ、と思った次第。

南アプシス

南アプシスにはおそらく建物が建てられるより前につくられていた炉のような施設がみられた。

同じく南アプシスの壁沿いに、これは建物廃棄後に置かれたこどもの墓があった。

マルさんとの「戦い」

発掘に参加する重要な人がいた。後で説明されたことであつたが、この人が調査に参加することが発掘許可の条件だったということであつた。ポーランド人の女性で、イタリア人と結婚してイタリアをフィールドとしている考古学者のマルゲリータ・ズラスカという方で、我々は彼女をマルさんと呼んでいた。事情がわからないうちは、勝手にやって来ていろいろと口を出すいやなヤツだ、とか、イタリア当局からのお目付役だろう、つまりインスペクターかな、と思ったりしていたが、正確なところは、調査メンバーで、役割は当局に提出する調査日誌を書く、というものであつた。この調査日誌は毎年提出を義務づけられるもので内容は文字通り日誌で、今日はどこを掘った、何か出てきた、というようなもので、考察などは含まれないものだそうだ。ところがこの日誌を書くということで彼女は我々の調査のあらゆる部分に介入してくるわけである。日誌を書くにはすべての状況を把握していなければならない、というわけだ。

そして当初はそもそも我々の調査にえらく疑いを持っていたようだった。つまり発掘調査といってもただやたらと目立つ遺構や珍しいものだけを掘り出すようなことをするので

はないか、調査という名の宝探しをやるのではないか、というような思いがあったようだ。我々は我々で、日本の発掘技術は世界でもトップ水準にある、と思っているから、いちいち発掘の仕方に口を出されるのはたまらない思いがした。ましてはるばる日本からでかけていってほんの7週間くらいのなかで一定の成果を上げなければならない立場では、発掘の基本に立ち返る余裕はなく、いわば常に応用問題を解くという覚悟で発掘に臨んでいたわけである。ところがマルさんは常に基本問題を繰り返し解かせようとする。そうしないと私にはわからない、日誌が書けないと言い出す。そうすると仕方なく彼女の言い分を通さざるを得なくなる。

そんなことの繰り返しで現場監督である私の敵になっていった。休みなどに外出して外でピザを食べるとき、ピザで一番ポピュラーなのは皆さんご存じの通り、トマトとモッツァレラチーズとバジルを載せて焼いたピッツァマルゲリータ、こいつを食べて鬱憤を晴らす、なんてこともあった。

私とマルさんの関係がガラッと変わったのは、アンフォラにこどもを埋葬したお墓が出てきた時であった。アンフォラが一個、横たわった形で出土して、これが出てきた日にはなんとなく得体の知れないうさんくさい感じの人たちが何人か見学にやって来ていた。そのうさんくさい連中が、アンフォラの出たところを見てしまったのでマルさんはえらく警戒した。マルさんは自分でも発掘泥棒に被害を受けたことかあり、このアンフォラは今日中に図や写真をとって取り上げよう、と強硬に主張したのである。その段階ではまだこれがお墓である、という認識はもっていなかったもので、今日中には処置できるだろうからまあ言うとおりにやろう、ということで作業は進んだ。そしていよいよ取り上げようという段になり、破片にして取り上げるほうが簡単であるから、割れ目のあるところから少しずつ取り上げていくと、中から骨が出てきてしまった。人骨である。子どもの骨が入っていることがわかった。その段階で午後4時頃、一日の作業は大体4時半頃終りにしていた。人骨が出てくればお墓であるから、残っている骨の様子、位置を図に書き入れ写真もとらなければならないし、その前提としてまず残っている骨を全部きれいに掘り出さなければならない。人間の骨はほかの動物に比べるともろもので、土を取り除いていくのには丁寧に神経を使ってやらなければならないし時間がかかる。今日はここで止めておこう、という意見もあったが、マルさんは強硬に今日中の処理を主張し、青柳さんの決断もあって続けることになった。お墓の処理をしたことのあるのはこの段階で日本人は私だけ。他のメンバーは家に帰し、青柳さん、鈴木さんと私と松山さん、そしてマルさんが残って作業を続けた。結局作業は日がすっかり落ちて真っ暗になり、車のライトをあてにして図を取る、ということになった。図は私が書いた。マルさんにやってくれ、といったが断られた(図2)。でもこれがマルさんが私たちを見直すきっかけを与えたのだろう。自分にできないことを我々ができる、という認識も持ったのだろうか。このあと、私とマルさんは直接話をすることを心掛けるようになった。

1993年の調査

前年調査終了後、監督局からは掘ったところは埋め戻して行けとの指示が出されたが、来年また同じところを掘り返すのは二度手間だということで、遺構面は不織布で覆い、それを土嚢で押さえてカバーすることで認めてもらった。発掘区の周りには柱を立て、フェンスを作っておいた。1年たつと土嚢袋は下のように表面が太陽の力でぼろぼろになって中に詰めた土が露出していた。

vano1 前室

クローバー形の柄のところはこの部屋への入口と想定できる敷居が有り、そこには白黒のモザイクで、ハート形とパルメット紋様の装飾があった。しかしこのモザイクの上に vano1 の壁が乗っており、三葉形の部屋以前の遺構であることは明らか。

白の地に黒のモザイク片で「植物紋を描いたもの。ハート形が向かい合って並びながら連続し、ハート形の尾と尾がつながった部分から二つのパルメットが直角方向に出ている。パルメットは中央が一本両側に三本ずつの合計七本の葉を持っている。またハート形の内側にも尾の方に向かってパルメットがあしらわれている。」

画像の検討などから紀元前一世紀後半から紀元一世紀頃のものとする。

vano 4 内の墓

vano4 の 3 層面で、西コーナー、南西壁中央、南アブシス南壁外面、東壁に接するようにして、4 基のアンフオラを使用した小児墓を 4 基検出した。建物を廃棄（放棄）する時点での埋葬と考えられる。

94年の調査開始

前年と同じように不織布を土嚢で押さえる処置をしていたのだが・・・前年我々が引き揚げたあと、この別荘にやってきたサッケッティ家の人たちが、家の横に広がる真っ白な風景にクレームをつけ、これは聞いてみればそうだろうな、と納得できるクレームだった。サッケッティさんは真っ白い不織布を周りの環境に合うように緑色にしる、という注文でそれを受けたタルクィニアのまちの業者は不織布の上から緑色の塗料をまいた。その塗料は不織布を通り抜け、その下にある壁体の上面にも染みこんでいた。

こういう位置関係だからクレームはもっともかな。

南西側にグリッドを拡張して vano1 の外側の様子を見た。vano 1 が形つくられるより前にあった部屋=空間の様子。壁の重なり・切り合いによる部屋の変遷もみられる。網掛けのところはまとまったモザイクの残るところ。

ambulacro (=歩道・遊歩道) 1 のモザイク

このモザイクが出てきたときは何が表現されていたのか欠けているところも多くあった

のでわからなかった。じっと眺めていたとき、突然左上の方の眼がわたしの目に映り、そして次の瞬間私は「顔がある!」と叫んだものだった。さらにじっと見ていると右下に横向きの動物の顔があることにも気づき、向かい合ったネコ科の動物が描かれていることがわかった。

ラジコンヘリも登場

上空からの写真を撮るためにラジコンヘリを使ったこともあった。これですいでにタルクィニアの町を撮影しようとしたが許可は出なかった。私たちの遺跡の撮影にも本来は許可が必要だった。許可を取るには、撮影用の器材についてそれを使用することの許可をまず取り、その許可された器材を使って撮影することの許可を軍から取る。遺跡のすぐ近くに軍隊の演習場があり、時折大砲の音などもしていたし、この一帯が上空からの撮影は禁止されているということについては理解できた。タルクィニア市の担当者に相談をしたところ、こういう申請は順番に処理されるので書類の山に埋もれたらいつ許可が出るかわからないということだったので、やってしまった。しょっちゅう宣伝用のセスナ機が広告をぶら下げて飛んでいたし、時には一人乗りのヘリコプターが上空にやってきて手を振ったこともあったのだが。役所にどういう形の撮影ならばいいのかと聞いたところ、ずいぶん昔にやっていたたこによる撮影は良い、とのこと。その心は、風ならば糸であっても地上とつながっているから、ということだそうだ。

2004年までの調査 全体図

2004年までの調査で範囲がこれだけ広がった。私がかかわったのは右下の三葉形の建物を中心とした部分だけ。

建築遺構の様式、建築物に用いられた刻印煉瓦などから、①創建は紀元前後の時期まで遡ることができること ②紀元1世紀の末から紀元後2世紀の初頭には、回廊を中心とする建物の基本的プランは確定したこと ③幾度かの改修を経て、4世紀後半には大規模な整地作業や建物装飾の全面的な改変、部屋の配置の変更などの大改修が加えられたこと ④5世紀から6世紀頃に、何らかの理由から廃絶したことなどが明らかになった。

海側にある風呂場地区

8角形でアプシスを持つ vano40、微温浴室 テピダリウム tepidarium、熱浴室（高温浴室） カルダリウム caldarium、冷浴室 フリジダリウム frigidarium には浴槽内に階段 壁に大理石板がはられていた。

Ambulacro1 西側のモザイク

南側の角には黒い炭化物があり、火を受けた?火事になった?兆候あり。

黒白の鍵盤のような縁取りの中に動物の狩猟場面が描かれている。また動物を追い立て

る人物だろうか。マントを翻している。

vano37 弧状の廊下の床の装飾

海に面した庭?をめぐる廊下の床の装飾は、海に関わる場面がある。左から順に拡大していく。

残り具合は良くないが保存して公開できれば相当なモノのはずだが、私有地なので埋め戻された。剥ぎ取られて売られたりしないようにモザイクの上におもりを載せて埋め戻したとのことだが、私たちの希望としては私有地内で積極的な公開は期待できないだろうから、剥ぎ取ってタルクィニアの博物館で保存公開することを望んだのだが。

遺跡は金になることを知っている人たちのいるタルクィニアにある遺跡で、私たちが泥棒にやられた話しはしたが、あの事件以外にも現場に鎖で止めておいてあった小型のコンボが一晩で盗まれたこともあった。

危惧するのは、いつの日かどこかのブラックマーケットにモザイクが売り出される、・・・ということにならねば良いが。